

草のうた

三浦綾子



草のうた

三浦綾子



草のうた

昭和六十一年十二月二十日初版発行

著者 三浦綾子

発行者 角川春樹

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店



東京都千代田区富士見一―十三―三

電話 営業部〇三―三三―八八五二

編集部〇三―三三―八八四二

振替口座東京三一―九五二〇八 ㊦二〇二

落丁・乱丁本はお取替えいたしません

Printed in Japan

ISBN4-04-872452-5 C0095

草のうた

装画・本文さし絵
本文詩

小松久子
尾崎道子

1

それは冬の夜だった。

まだ三、四歳さいだった私は、祖母と二人で据すえ風呂ぶろに入いっていた。台所の片隅かたすみの一坪つばほどの土間にその風呂はあった。台所の天井てんじやうから下がっている薄暗うすくらい裸電球はだかでんきゅうに湯気がまつわり、片隅の風呂まではその光は届とどかなかつた。焚口たきぐちの火が土間の壁かべに光を照り返かえしていた。

祖母は水仕事みづあ事に荒あれた手で私を抱だき、

「昔々むかしねえ」

と、話を聞かせてくれていた。祖母といつても、まだ五十二、三の歳であつた。この母方の祖母はたくさんのひと口話やおとぎ噺ばなしを知しっていて、

「あのね、ある所にとっくりがいたんだと。そこに玉ねぎが遊びに来たんだと。二人でお風呂に入いって、玉ねぎがお風呂を出でようとしたら、とっくりが『たまたまきたんだもの、とっく

りと入って行きなさい』って言ったんだと」

とか、

「昔々ね、靴くつと胡瓜まぼろしが川に流れていたんだと。その靴の中に胡瓜が流れこんだんだと。そしてね、胡瓜が『ああ、きゆうくつだ、きゆうくつだ』って言ったんだとさ」

とかいうひと口話をよく話してくれた。まだ三、四歳の私にはそれがおもしろくて、何度聞いても飽あきることがなく、聞きくたびに笑わらったものだった。

その夜も祖母の話はなしを聞きながら、湯の中に体を沈しずめていたのだが、突とつ如じよ、裏うらのほうから太鼓たいこの音が聞こえてきた。私の家いへと隣家りんかとの間まには幅はば四メートルほどの広い路地ろぢがあつて、長さ四十メートルに及およんでいた。その路地の真まん中ちゆうあたりに井戸いどがあつたのを覚えてゐる。太鼓たいこの音ねに、私は思おもはずガラス戸かど越こしに暗くい外そとを見た。と、雪道ゆきみちを白しろい着物きものを着きた人々ひとびとが五、六人、一列いっけつになつて何なにやら唱となえながら、路地ろぢに入いつて来るのが見えた。その低い声こゑも、うちわ太鼓うちわたいこの音ねも、白しろい衣服いふくも、幼わさない私わたしにはまことに異様いさぎよであつた。恐怖きょうふのあまり、私わたしは祖母そとの胸むねにしがみついた。

何なにのことではない、寒行かんぎやうの善男善女ぜんなんぜんによの一行いっけいにすぎなかつたのだが、暗くい路地ろぢに、輪郭りんかくもおぼろな白しろい衣いの人ひとたちが、「南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう」「南無妙法蓮華經なむみょうほうれんげきやう」と太鼓たいこを叩たたきながら近づちかづいて来る姿すがたは、言こといようもない無気味むきみさで迫せまつたのであつた。幼こゝろい頃ころを考かんがへてみると、幼年幼年時代じだいというものは、無気味むきみさの中ちゆうにある時代じだいといえるのではないだろうか。むろん、楽しい思おもひ出でが全ぜんく

ないというわけではない。だが私は、幼い頃は無気味さと、淋しさ、不安、恐怖の入りまじった中であつたような気がする。幼子にとつてはすべてが全く新しい体験である。新しい体験というものは、楽しいことよりも不安に満ちているものではないだろうか。

私は生来、虚弱な体質であつた。腺病質のためか、よく熱を出した。そんな時、夜中に目がさめると、つけっ放しの（当時は電気はメーター制ではなかつた。ほとんどの家が、真つ暗にして寝るといふことはなかつたようだ。幼い子供のいる家は特に点灯したまま寝ていたようだ）電灯に黄色い輪が見えて、それがまた妙に不安を掻き立てた。部屋の隅に薪ストーブが燃えていて、その上には赤銅の深い洗面器がかけてあつた。たぶんその洗面器のお湯で、熱い湿布をしてくれていたのだろう。あるいは、湯気を絶やさぬように医師に命じられていたのでもあろうか。ストーブの傍には、私たちが「当麻の伯父さん」と呼んでいた父の義兄が、よく雑誌に読み耽っていたのを私はたびたび見た。この人は、田舎の医者時代の代診をしているとかで、私の父母は、子供たちが病気の時には、看病を頼んでいたようである。

その夜も熱に浮かされて目をさました時、私はいつものように電灯が黄色い暈をかぶっているのを見、その視線をストーブのほうに移した。その途端、私はぞつとして叫び声をあげるところであつた。色の黒い、髪も真つ白な老婆が、じつとストーブの前に背を屈めていたのだ。その老婆の顔にストーブの薪の火が映つて、ちろちろと光っていた。目が吊り上がって見えた。もしその時、私が高熱のために再び眠らなかつたとしたら、私は恐怖のために氣を失つたかも

知れない。それは祖母の話に出てくる山姥によく似ていた。

が、その人は山姥ではなかった。私が初めて見たというだけで、父方の親戚の人だったのだ。私の看病に駆り出されて、寝ずの番をしてくれていたのだ。馴れてしまえば、親切な優しい人であった。何も、気絶するほどに恐怖することはなかったのだ。

やはりこれも病気の夜だった。私は夢とも現ともつかぬ中で、妙な幻を見た。長い、黒い塀があった。私の家のすぐ前には、半丁にわたる大きな屋敷があって、黒い高い塀で囲まれている。その黒い塀が幻に現れたのだろうか。塀の上に、青白い若い男の首だけが宙にふわふわと浮いていた。首だけといっても、その首がふつりと斬られていいるのではなく、尾を引くように次第に細くなって、その末端は塀の陰にかくれていた。その男の首はゆらゆらと揺れ、私をじっと見つめたまま、視線を離そうとはしない。そして彼は、赤い唇を大きくあけて、にたにたと笑ったのだ。

私は今に至るまで毎夜のように夢を見、時折幻覚を見てきた。それらの中でも、このように私をおびえさせたことはなかった。私には現実に幽霊を見た体験のようにさえ思われるのだ。

その病気が治って、家の中で起きて遊べるようになった頃だった。私は八畳間のその窓からいつも外を眺めていた。のどには真綿を巻き、綿入れの袂に手を入れて、私はじっと外を見ていた。べつだん、外に出たいとも思わなかった。家の中にいなさいと言われれば、言われるままにいつまでも家の中にいた。大人の言うことに逆らうなどということは、その頃の私には考

えられないことだった。なぜそうだったのか、私にはわからない。たぶん私は臆病だったのだと思う。親の言うことさえ聞いていればまちがいはない、という意気地なしたたかかも知れない。そんな私でも、近所には幾人かの友だちがいた。一軒置いて隣りには、私より一つ年下の道子という女の子がおり、その家の向うには、私と同じ年頃の男の子がいた。その女の子の家も、男の子の家も、共に一戸建ちだった。どちらも⑤藤田という造り酒屋に勤めていた。どちらの家も、私の家よりはずっと金持に見えた。その向うは酒屋の蔵が幾棟も並んでいて、蔵と蔵の間に、茎の長いタンポポがひよろひよろと伸びていたのを覚えている。

私と同じ年頃の男の子は「やっちゃん」と呼ばれていた。だが、その子の名前が「保夫」か「泰士」か「弥一」か、本当のところはわからない。が、その子のことを思い出す時、私はなぜか「弥っちゃん」という字で思い出してきた。「弥っちゃん」は色黒で、ちっとも整った顔立ちではなかった。地味な性格で、いつもにこにことしていて、目が細かった。その弥っちゃんが、なぜか私は好きだった。弥っちゃんの傍にいと、なぜか安心があった。不安がなかった。この弥っちゃんや、その隣りの道子ちゃんなどと、⑤藤田の酒の仕込み桶に藁を敷いて、まごどをした。仕込み桶は蔵のうしろの大きな広場に、幾つも幾つも干してあった。この遊び場は私には楽しい所だった。酒の匂いの染みついている仕込み桶は、子供が七、八人入っても、少しも狭くないほどの大きかった。少々風が強くても、雨が降ってきてても、この桶の中では心配がなかった。それに不思議なことに、大人たちはこの子供たちの遊びを叱ったことがな

った。大事な仕込み桶の中でままごとをしているというのに、叱らなかつたのは、いったいなぜだろう。弥っちゃんや道子ちゃんの親が、酒屋の重要な職員であつたからだろうか。

私が高熱を出して男の首の幻を見、その病が癒えた頃、人が死んだ。若い男の人だつた。弥っちゃんの兄だと私は聞かされた。

「ほら、弥っちゃんのお兄さんのお葬式が行くよ」

と、葬式の日、家人の誰かに言われた。だが私は、なぜか窓に駆け寄ることが出来なかつた。私はまだ死というものを知らなかつた。知らない筈だが、子供なりに死というものを何らかの形で体験していたのだろうか。鼠取りにかかつた鼠の死、近所の犬の死、頭をもがれたトンボの死、そんな類から、幼いなりに死に恐れを感じていたのだろうか。私は葬式を見たら、自分がたちまちまた熱を出して死ぬのではないかという恐怖に駆られた。しかも私は、あの幻に現れた扉の上の男の首が、弥っちゃんの兄に思われてひどく恐ろしかつたのだ。

弥っちゃんの兄が死ぬ前の日であつたか、あの髪の真つ白なお婆さんが言つた。

「カラスの啼き声が変だよ。誰か死ぬんじゃないのかね」

死んだあとに、同じことをまた言つた。

「カラスの声が悪いと思つたら、やっぱり人が死んだんだね」

私はその言葉を聞いて、またもや言い難い恐怖に襲われた。それはまるで魔法使いの言葉のように思われた。言い方も恐ろしかつたが、言つたことが当つたことも恐ろしかつた。私は四

歳の幼い魂ながら、この世には言い難く恐ろしいもののあることを、深く感じてしまったような気がする。

もしこの時、あのお婆さんがカラスの啼き声を言わなければ、弥っちゃんぢやんの兄の死を、私もっと何げなく受け取ったかも知れない。いや、もし熱などを出さない丈夫な子供であったなら、朝から晩まで外で遊んでい、金ぴかの霊柩車の傍に飛んで行って珍しがって見たことだらう。当時、散弾さんだんと云って、マッチ箱ばちばこのような小さな箱に入った、赤や黄の、仁丹じんだんに似た小粒こつぶの甘い菓子あまかしがあった。葬式まうしには、出棺しゆつかんの前に、黒い紋付もんつきを着た男が、この散弾を盆ぼんに山盛りやまもりにして持って出て来る。待っていた子供たちが、わっとその男を取り囲む。

「ちようだい！ ちようだい！」

子供たちが手を出して叫ぶ。子供たちには、誰が死んだとか、死ぬことは恐ろしい、などという想おもいは一つもない。ただ散弾が欲しいだけだ。私も、生れて初めての葬式を、散弾をもらうことしか考えない子供として体験することが出来たらよかったのだ。だが私は、あの高熱の中で見た男の首と、カラスの声との中で、初めての葬式を体験してしまったのである。

2

四歳以前の思い出の中には、なぜか家族があまり登場しない。これはいつたいどういうことだろう。薄暗い部屋の中に自分一人がいて、時々、祖母や母や親戚の者の顔がひよいと現れる。そんな妙にしんと静まりかえった世界が、幼児特有の世界なのだろうか。

私は一九二二年（大正十一年）四月二十五日の朝、旭川市四条通十六丁目で生れた。この時、私を迎えてくれた家族は、父鉄治三十三歳、母キサ二十九歳、長兄道夫十二歳、次兄菊夫十歳、三兄都志夫七歳、姉百合子四歳、そして父の妹すなわち叔母スエ十三歳（いずれも数え年）の七人であった。父方の父母はすでになく、母方の祖母は、その子供たちと共に数丁離れた所に住んでいた。この祖母が風呂の中で、ひと口話をしてくれた祖母である。この祖母は、母がお産のたびに手伝いに来ていた。いやお産ばかりではない。子供たちが病気だというと、すぐに駆けつけてくれた。

私は母と寝た記憶はないが、祖母に抱かれて寝た記憶は鮮やかに残っている。ネルの寝巻を着て布団に入る私の背をなで、

「綾ちゃんはさかしい子だ、綾ちゃんはさかしい子だ」

と、祖母はよく言ってくれた。さかしいという言葉はよくはわからなかったが、その声音はいつくしみにあふれていて、私にとって心地よい言葉であった。ただ、祖母の荒れた手が、私のネルの寝巻に引っかけかけて、それが私の心を痛めた。祖母は毎日襦袢や下着の洗濯のために手を荒らしていたのだ。

「ばっちゃん、手いたい？」

私は時々そう尋ねたものだ。祖母は床の中でもよく話をしてくれた。「カチカチ山」や「猿蟹合戦」、「山姥と瓜子姫」の話を、私は何十回聞いて育ったことだろう。私がその後小説に魅かれるようになったのは、この祖母のおとぎ噺のおかげだったかも知れない。

誕生の日に話を戻す。

私は自分の生れた朝が、なぜか雨雲の低く垂れこめた朝のような気がしてならない。まるで、自分の目でその朝の空を窓越しに見たかのように、暗い無気味な空が私の臉に描かれている。誕生日のたびに、親たちはその日の思い出を私に語ってくれたものだ。

「綾子、お前の生れた朝はね、向井病院が大火事だね」

父母や祖母から、幾度この話を聞かされたことか。幾度も聞かされているうちに、向井病院の火事の現場を見たかのように、赤い炎が噴き上がり、黒い煙が空に舞うさまを容易に想い描くようになった。いや、そればかりではない。ばちばちと物の燃える音や、焼け跡の焦げ臭い

くすぶった匂いさえ記憶しているような錯覚を覚える。消防車のけたたましいサイレンが、空に響くのを聞いたようにさえ思う。そしてそれは、今にも降り出しそうな曇り空の下での出来事に思われるのだ。

誕生日のたびに聞かされたもう一つの話がある。それは私が、仮死の状態で生れたということだ。

「お前はね、臍の緒を首に巻いて、泣くことも出来ずに、ぐったりとして生れたんだよ」母はよくそう言った。手馴れた産婆は、あわてながらも私を逆さにし、尻を幾度か叩いて、やっと蘇生させたという。私は思春期になった頃、この仮死の自分を思い出すたびに、

(神は私の誕生をためらったのではないか)

と、よく思ったものだった。そしてまた、

(誕生したことがまるで罪であるかのように、私はいきなり尻を叩かれた。生れるに値しなかったのであろうか)

などと考えたものだ。だが一方、他の赤ん坊のように、勢いよく呱呱の声もあげず、大人たちを驚かせ、心配させ、あわてさせたとは、なかなか天晴ではないかと冗談を言ったりもした。いずれにせよ私の誕生は、明るい楽しい雰囲気とは別の状況の中にあつたようである。

生来体が弱かったせいか、私は部屋の片隅でひっそりと本を読んでいることが好きだった。上に兄や姉がいたせいか、字を読み始めたのは早かった。四歳の頃には、かなり部厚い本を一

石けり

けいこちゃんが帰った
ようこちゃんも帰ってしまった
雪が融けて生れたばかりの土に
折釘で描く石けりの輪
「意地悪したのは私でないよ」
つぶやけば
ついと涙が頬をはしる



冊、いつも手にしていたような気がする。それは今の童話の本のように美しいものではなかった。姉の読み古したものであったのか、表紙も破れ、頁もめくられていた。子供の本とは思えぬほどに、挿絵一つなかった。だが、詩や童話がたくさんおさめられていて、読み飽きることがなかった。私の膝の上には、いつもその古ぼけた本があった。この本の中にあつた一節を、私は今もはつきりと覚えてゐる。

「テフテフサンハ、クライハヤシノナカニ、ヒラヒラト、ハイツテユキマシタ」

この文章が、私の心を不安にさせた。文字どおり心が震えるようであつた。私の目に暗い林が見えた。そしてその中に、白い蝶がひらひらと舞つて行く優美な姿が、はつきりと見えた。が、なぜこの一節が私を不安にさせたのであろう。この蝶が再び暗い林の中から出て来ることが出来るかどうか、私にはそれが気がかりでならなかつたのだ。蝶が暗い林の中に入って行く姿は想像出来ても、その中から明るい光の下に出て来る姿は想像出来なかつたのだ。この蝶への不安を、私はずいぶん長いこと抱えこんでいたような気がする。

言葉で思い出すことが二、三ある。

あれは私が、数えて五歳になつていただろうか。たぶん夏であつたと思う。私は近所の家の裏口に顔を出した。その家の土間は広くて、煉瓦を積んだ「へつつい」があつた。その前に屈みこんで、五十くらいの女が二人、昂奮して話し合つてゐた。私が顔を出したことなど、二人は気にもとめていなかつたようだ。